

博士学位論文審査等報告書

審査委員 主査 松原 齋樹
副査 佐藤 仁人
副査 宗田 好史
副査 長野 和雄

1 氏 名

戸田 都生男

2 学位の種類

博士 (学術)

3 学位授与の要件

京都府立大学学位規程第3条第3項該当

4 学位論文題目

森林環境教育の視点からみた環境配慮的な意識・行動の実態に関する研究
-木を使ったものづくり活動と住宅設計演習が建築・住居系学生に与える影響-

5 学位論文の要旨及び審査結果の要旨

【学位論文の要旨】

別紙に記載

【論文目録】

別紙に記載

【審査結果の要旨】

本論文は、木を使ったものづくり (以下 WC) 活動が、建築系学生参加者に与える影響、特に設計演習の取り組みに与える影響、および作品であるベンチの利用者に与

える影響について考察したものである。

本論文は6章からなる。

第1章では、多数の文献をレビューして、研究の背景・目的を述べている。

第2章では、木を使ったものづくり（以下 WC）活動が参加者に及ぼす影響を明らかにするため、奈良県の川上木匠塾に参加した6大学の建築系学生62名を対象とした調査を行い、感想文のテキストデータの分析を行っている。まず<人>に関する内容、<木・製作・森林>等に関する内容、<その他感想>を『肯定的』『反省的』『感謝』『否定的』内容にそれぞれ分類し、次に KJ 法で整理している。その結果をさらに【人の役割】【協力】【人とのコミュニケーション】【感謝】等のグループに分類し、図解して考察を行っている。

主に得られた知見は、①WC 活動の目的と得られる効果には自然や木とのふれあい以外に「人とのつながり」があること。②自省や<人>への『感謝』の気持ちが、WC 活動をより改善したいという姿勢につながる。③<人>との積極的な【協力】が、自分の役割を認識させ参加者に【学び・成長】をもたらしていること、等であった。

第3章では、大学の住宅設計演習での木造住宅課題における環境配慮的な提案の実態と WC 活動の履修有無との関連性を明らかにするために、住居系学生130名を対象にアンケート調査を行い、自由記述を含めて分析・考察を行っている。

主に得られた知見は、①WC 履修者は住宅設計演習の課題を完成させる達成感をモチベーションにしており、具体的に環境配慮的な計画を意図していること。②WC 履修者は大学での授業等（講義・演習・ゼミ）を含む実生活の環境配慮的な意識と行動に対して履修の影響を受けていること。また、WC 履修者は体験学習等の経験があるために環境配慮的であり、「メディア情報」の影響が WC 非履修者よりも小さいこと。③多くの学生は住宅設計演習で環境配慮的な設計に考えを至らせる余裕がないが、課題に楽しさや面白さを感じる工夫があると環境配慮的な提案が積極的になされる可能性が高いこと、などであった。

第4章では、WC 活動において作成された「木製ベンチ」がその使用者の森林保全の意識と行動に及ぼす影響を「樹脂製ベンチ」と比較して考察するため、神戸市の高取山への来訪者148名を対象とした調査を行っている。

主に得られた知見は、①「WC 活動認知者（木製ベンチは WC 活動の学生が作製したことを知っていた人）」や登山会会員にとっては、「樹脂製ベンチ」より「木製ベンチ」の方が「風景の魅力」が向上すると思う人が多かったこと。②ベンチの設置により「森林保全の大切さの理解が増す」と思う割合は「WC 活動認知者」の方が多く、「木製物の利用」が森林保全の意識を高めると思う割合は、「WC 活動認知者」と非認知者の間で差があること。③破損した場合の修繕の協力意欲は「木製ベンチ」の方が「樹脂製ベンチ」より高く、「木製ベンチ」を維持管理することで省エネルギーや省資源等の効果がえられることや、WC 活動の学生が継続的に地域に関わることが期待さ

れたこと、等であった。

第5章では、各章の知見に対して総合的な考察を行っている。

第6章では、各章の結論を要約してとりまとめている。

以上、本論文は、木のものづくり活動が、建築系学生参加者の「自然」「木」および「人とのつながり」の学びに影響すること、また設計演習において環境配慮的な計画を意図することに影響すること、さらには木のものづくり活動の作品であるベンチを設置することにより、一般の登山者にポジティブな影響を与えること、等を明らかにしており、たいへんに有意義な知見を得ている。

以上より、本論文は博士学位論文の要件を十分に満たすものであると評価できる。

6 最終試験の結果の要旨

本論文の内容は公開発表会(2015年2月16日(月) 午前9時30分~10時40分、本学附属図書館視聴覚室)で発表された。本人の発表を受けて、幾つかの質問がなされた。その内容は、研究対象・方法等の妥当性、木のものづくり活動以外の野外活動との差異、建築系学生とそれ以外との差異、等であった。申請者は、それぞれの質問に概ね的確に回答した。

また、公開発表会とは別に、主査・副査による審査会を行ったが、特に問題となる点はなく、博士論文として十分な水準の研究内容であることが確認された。

以上、最終試験の結果は、公開発表会および審査会での結果を踏まえ、審査委員全員一致で合格と判断した。

以上